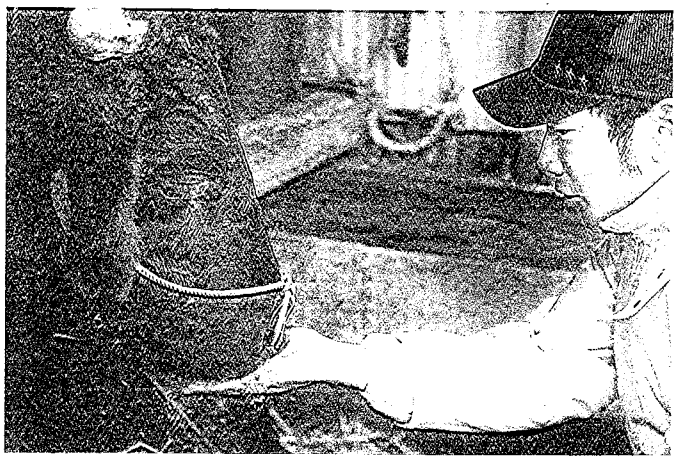
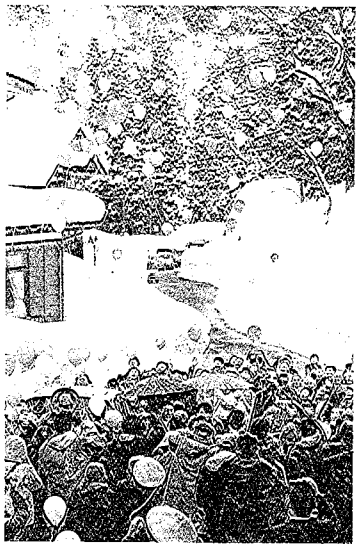
eye



村を離れる日の早朝、手塩にかけて育てた牛を見つめながら飼をやる籾山さん。「牛は経済動物だから、いつか離れる。でも最後に結婚式でいい思い出ができた」＝3月25日



▶籾山さん（左）の結婚式で、牛が先導する花嫁行列。新郎千鶴さん（中央）を介添えした曽根イミ子さん（右）は「籾ちゃんがいなくなって寂しくなる。自分の息子でもこんなに感じたことはない」と涙を流した
◀花嫁行列で一斉に風船を飛ばす参列者ら。夢のような光景に、籾山さんは「家族のように温かくしていただき、一言で言えない思いがある。この土地に来てよかった」＝いずれも3月5日

夢を語る集落 新潟・池谷から

農業再興 後輩にリレー

中越地震後に村に住む若者が増え、限界集落を脱した池谷（新潟県十日町市）。就農を目指すIターン者たちが歩む先には、農業の未来と向き合い、道を切り開いてきた一人の男性がいた。

茨城の農場職員 2年半奮闘、離村

籾山旭太さん（30）。東京農大卒業後、日本農業実践学園（水戸市）の農場職員として学生たちを指導してきた。ある時、後継者不足と言われながらも農村に就職先がない矛盾を問われた。その答えを知るため、2年半ほど前に退職し、棚田に囲まれた池谷での農業研修を決めた。生活費は貯金やアルバイトで賄った。

棚田を借りて作った米の直販を手がけ、地域おこしに訪れるボランティアの世話も。村の神社に眠る太鼓を見つけ、過疎化で30年間行われなかった盆踊りを復活させた。

「農業の基本は循環」との考えから、高齢化が進む村では養えなくなっていた牛を2頭飼い始めた。「放牧することで耕作放棄地がよみがえり、牛ふんは堆肥として土作りができる」

3月、籾山さんは離村前に結婚式を挙げ、牛が先導する花嫁行列で雪が解け始めた道を練り歩いた。内外から集まった100人以上の参列者が祝福した。「隠居」と呼ばれる庭野功さん（71）は「彼はこまい事何をお願いしても嫌な顔一つしなかった。あんなに農業に熱心な青年はいない」と信頼を口にした。

籾山さんは「外から人が来ることで農村の人が初めて気づくこともある。伝統的な農業を大事にすることでしか農業は取り戻せない」と話し、地域おこしを担う後輩たちに「伝統を引き継ぎ、村を幸せにすること」などの覚書を残して村を離れていった。

写真・文 森田剛史

2月に池谷に移住し、籾山さんと寝食を共にした旧分校で覚書に目を通す坂下可奈子さん。「1人で不安もあるけど、籾山さんだったらどうするかな、と考える」＝3月25日

東日本大震災被災地に送る米を精米し、箱詰めする曽根武さん（中央）ら村の人たち。「現地に行くのは難しいけど、中越地震後に受けた恩を返したい」＝3日

就農目指すIターン者の心得

籾山さんが、これから地域おこしにかかわる坂下さんら後輩に残した覚書には、村の生活から得た「教え」が書かれていた。①「信頼されること」②「村の中で働くと循環が生まれる」③「農業に取り組むこと」④「伝統を引き継ぐこと」⑤「地域と人をつなげること」⑥「地域の中で考えること」⑦「隣の人と違うことをすること」⑧「村を幸せにすること、幸せに暮らすこと」

「地域外の人が農村に新鮮な視点を与える」と話す籾山さんは、「限られた資源の中で代々守ってきた土地や水を、新規移住者に継がせるのは問題が多く、地元の人と協調しながら新しいことに取り組む積極性が求められる」と知った。

覚書の最後に「農村の後継者問題は、（情報化が進み）価値観が都会も田舎も一緒になってしまったことにも原因がある。地域に根差した考え方を地域全体で取り戻すことで、人はまた戻ってくると考えています」と結んだ。